

上ノ国勝山館(勝山館, 和喜の館)(国史跡・続百名城)

(檜山郡上ノ国町上ノ国)(館神八幡宮)

15世紀ころ和人・渡党(わたりとう)と称される本州系の人々が北海道南部への進出の拠点として築いた道南12館といわれている館のひとつです。

この頃の渡島半島は津軽の安東氏が「下之国」(上磯～函館市付近)、「松前」(松前町を中心とした地域)、「上之国」(上ノ国町を中心とした地域)に守護(その地域の支配を任された人)を置いて支配していました。下之国の守護は上磯茂別館に、松前の守護は松前大館、上之国守護は花沢館にいたといわれています。

本道最古の記録である「新羅(しんら)之記録」には、花沢館の館主蛸崎季繁(かきざきすえしげ)が長禄元年(1457)のコシヤマインの戦いの際にも固く守ったということが書かれています。

昭和20年頃、頂上部が耕作された時には約2,000枚の銭が、近年館後方部から15世紀後半の中国製青磁、珠洲焼の播鉢などが発見されています。

面積 約29,000平方メートル

昭和52年4月12日 文部省指定

平成18年3月31日 史跡の統合、追加、改称 文部科学省指定

管理団体 上ノ国町

上ノ国町サイトによる

勝山館(かつやまだて)は、北海道檜山郡上ノ国町にあった中世の日本の城(山城)。昭和52年(1977年)4月12日、「上之国館跡」のうちの一つ「勝山館跡」として国の史跡に指定された。

概要

築城年代は不明だが、館北端にある館神八幡宮(たてがみはちまんぐう)の創建が文明5年(1473年)と伝えられているため、この頃の築城と推定されている。蠣崎信広あるいはその子光広以降、蠣崎氏の本拠地とされていたが、光広の時代の永正11年(1514年)に松前の徳山館に本拠を移転して以降は、主要な副城として脇館転じて「和喜の館」と称され一族を配した。

夷王山の中腹、南から北へと伸びる斜面を利用して長さ270メートル、幅100メートルで総面積20.9万平方メートルの規模を有する。さらに城の背後から山頂に向かって中世和人の墳墓群(夷王山墳墓群)が存在する。

戦後、夷王山墳墓群の調査が先行され、館そのものの本格的調査は昭和52年(1977年)の史跡指定後の昭和54年(1979年)になってからである。その結果、15世紀後期から16世紀後期にかけての陶磁器・金属器・漆器・骨角器など7万点におよぶ遺物が出土しており、主要な遺物921点が国の重要文化財に指定されている。2017年(平成29年)4月6日、続日本100名城(102番)に選定された。

Wikipediaによる



